

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23531213

研究課題名(和文) 絵本の国語教材化における絵の読み解きに着目した国語教育に関する研究

研究課題名(英文) Japanese language education focusing on interpretations of pictures contained in picture books as language lesson materials

研究代表者

有働 玲子 (Udou, Reiko)

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：50232880

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、絵本の絵の読み解きに着目して、国語教育の教材化についての視点を提示することを研究の焦点として提案を行うことを目的とした。絵本という素材を研究対象として用いることにより、その素材がどのようにして国語教科書に用いられていくようになったのか、その経過などについても考察を行った。また、原典絵本との比較も行い、教材化された絵本の絵と、教科書教材の挿絵との関係との考察を試みた。さらに、具体的な指導事例について幼稚園、特別支援学校、小学校、高校に関してその方面のベテランより知見を得た。

研究成果の概要(英文)：The study addresses the interpretations of pictures contained in picture books and is intended to propose, as a distinct research focus, the process by which those materials have been integrated into the Japanese language education system. It discusses the historical perspective on how picture books and their pictures were introduced in Japanese language textbooks. The study also compares pictures between the textbook versions and the original pictures. It describes specific cases of experienced teachers who have used picture books as a part of their Japanese teaching efforts in kindergarten as well as special needs, primary, and high schools.

研究分野：国語科教育学

キーワード：絵本 国語教育 挿絵 幼稚園 特別支援 絵本書店 音声 読み聞かせ

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景は、絵本が言手伝である国語教材が数多く散見することから、様々な場における絵本指導のありようについて考察をしたいということにある。

つまり、子どもを読者として想定するならば、原典である絵本を既に乳幼児期に、絵本としてそのものを享受してきたことが想定される。

さらに、子どもは発達段階を経て、今度は教科のなかで、教材として姿を変えて絵本と出会うといえよう。そのことは、読者にとって戸惑いを生じ、そこででの指導のありようが錯綜するのであろう。

そこで、そのような幼い読者の目に移った絵本の絵の扱いに着目することを試みることとした。同時に絵本作家の願いとはどのようなものかを明らかにすることを試みようとした。

又、原典絵本を指導する幼稚園、特別支援学校、小学校、高等学校などの場において、どのようにそれらが扱われているのかを明らかにしようと試みた。また、絵本を作成する側はどのような思いで作成をするのか、その知見を得ようとした。

具体的には、学校では、特に挿絵の扱いなどはどのようなものであるのかということも注目した。

既にこういった絵図についての読み解きは三森ゆりかが次の著書の中で述べている。それは『絵本で育てる情報分析力-論理的に考える力を引き出す』（一声社、2002、12）である。そこで、この著作を手がかり（全体像を捉える、部分の情報、絵から自分へ）にしつつ、具体的な絵本を用いて、考察をすすめることとする。なお、その作業においては、小学校国語教科書及び指導書を参照しつつすすめることとした。

2. 研究の目的

先の動機に記したような問題意識を明確にするために、次のような目的を明らかにした。

①原典絵本『スイミー』（レオレオニ・谷川俊太郎訳・好学社）では、どのような絵が挿絵の時には省かれ、どのような相違がみられるのか。

②『スイミー』の場合は小学校の国語教材ではどのような指導がみられるのか。

③その他の原典絵本をとりあげ、絵本及び教材執筆の作者にその思いを聞き、考察をおこなう。

④絵本を用いる指導について幼稚園、特別支援、小学校、高校の事例を用いて考察をおこなうと同時に、書店の思いを明らかにする。

3. 研究の方法

読者が絵本とどのようにして出会うのかという事を第一義に考慮する。第二義には、指導者の立場からの着眼点を重視する。また、書店及び作者の知見も考慮する。

①原典絵本『スイミー』について、絵のなかでもとりわけ教材と異なった個所とその意味について記す。

②原典絵本『スイミー』を用いた小学校国語教材とその指導のありようについて考察を行う。

③上記の事例を物差しとして、作家が挿絵を書いている原典絵本『せかいいちうつくしいぼくの村』を考察し、作家である小林豊氏にインタビューを試みてその思いを聞く。

④③の手続きを経て、同絵本の小学校教材の指導書をまとめ、さらに全体を総合して留意点についてまとめる。

⑤絵本が原典となっている教科書教材の一覧を作成する。（本論では一部を掲載した）

⑥幼稚園、特別支援、小学校、高等学校の場面で絵本がどのように指導をされたのかを明らかにする。

4. 研究成果

（1）絵本の考察 1

①原典絵本『スイミー』では、どのような絵が挿絵の時には省かれ、そのような相違がみられるのか。

①-1（教科書では省かれている箇所についてまとめる）

原典絵本の内容は、平和に暮らしていた主人公スイミーが突然マグロに仲間が食べられてしまう。その失意を海底を浮遊することで自己回復し、遂にマグロが撤退するという話である。なかでも、幼い読者にとっては、全体を理解するうえで、大きな異なりの生じてくる場面がある。その象徴的なものが次のような場面の絵図版である。これは、主人公の失意からの自己回復を表す場面である。

この絵本『スイミー』はコラージュという手法を用い、さらにスイミーと他の仲間を描き分けるための手法が用いられている。

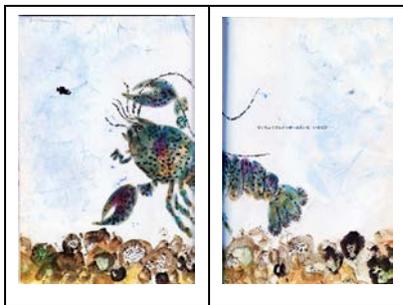
この絵本では、スタンプングの手法例を指摘するものが多い。さらに具体的に構造、プロット、スタイル、形式、視点、時制、設定、トーン、などをテキスト分析と解釈のための指標とする。なお次例はその一例である。

そこで、次に具体的に絵をあげて述べる。これらの部分は、スイミーが海の底を泳ぎながら色鮮やかな海の生き物たちと出会い、失意の底から立ち直る場面であり、絵本の14場面中6場面を占めている物語世界の重要な場面である。

そしてこの部分の絵図版の読み取りがこの絵本の内容理解を深めることになるのである。



薄く紫がかった背景の中に桃色のクラゲが描かれている。スイミーはそのクラゲの全体像を見るように、左側に描かれ、スイミーの微小さと同時に対峙するクラゲの巨大さが確認できる構図になっている。「けれどうみには、すばらしいものがいっぱいあった」と述べる主人公に、読者は同化しながら「おもしろいものをみるたびに」ということが実感できる。つまり、出会いを示す文言と絵との両方を読むことを通して、その対象を把握できるようになっている。



次はスイミーが左から右下を見下ろす構図である。スイミーの黒い瞳が見つめている方向には、いせえびの姿がある。眸が描かれている



その次の絵は左下で濃い赤桃色の魚が泳いでおり、スイミーはそれを喜びの表情で口を開いて眺めている。それらの魚たちはすべて右を向いて泳いでいる。動きが



次は一転して海底である。わかめの左側は緑色、右側は鮮やかな色であり「ドロップみたいないわ」も見事に可視化されている。

次の絵は、うなぎである。読み手はうなぎとスイミーとの両方を視野に入れながら、スイミーの視点で述べるのである。それは次の「かおをみるところには、しっぽをわすれているほどながい…」に続く。この視点でよみすすめている。

絵図ではその視点から描かれるのである。



その結果、その長さを実感する。絵本らしい読み取りが最も生かせる部分で、読み聞かせの際にはそのイメージを絵本の読み声で表現したい箇所である。



次にスイミーは目を細めイソギンチャクを眺めている。スイミーの視点から描かれており、瞳の動きからどこに着目しているのかそのまなざしが分かるように描かれている。

このように主人公スイミーが左側に描かれ、主人公の視点からその海底での生き物との交流の様子がわかるのである。この絵図はこの絵本の最重要な箇所である。原典絵本の中心的な箇所なのである。

それはこの絵図を読み手に読み味わうことを作者は意図していると想定できる。それぞれの絵本には絵図版のクライマックスがあり、それを事前に読み解くことで、絵本への読解が深まる事例である。

①-2 教科書の様相

一方、教科書と同じ原典の『スイミー』が昭和52年から採用されているが上記の箇所は、絵本の12ページ分が1ページになっている。文章としては次のようである。

スイミーは、だんだん げんきをとりもどした。にじ色のゼリーのようなくらげ。

水中ブルドーザーみたいな いせえび。見たこともない 魚たち。

見えない 糸で ひっぱられて いる
ドロップ みたいな 岩から はえて
いる こんぶや わかめの林。
うなぎ。
かおを みるころには しっぽを わ
すれて いるほど ながい。
そして、 風にゆれる もも色の やし
の木 みたいな いそぎんちゃく。
(平成 26 年 2 月、光村図書出版)

②『スイミー』の国語教材における指導

詳細な読解指導の時代から、次第に合科的指導への変遷がある。現在は次のように幅広い指導が視野に入れられている。

- 図工の学習と関連させて絵本作り、音楽の「スイミー」の歌と関連させてのミュージカルごっこなどが考えられる。
- 自分なりにサブタイトルを考え、場面も限定して、二枚ぐらいの絵と文で、ミニミニ絵本を作る。
- 「スイミー」の歌を覚えながら、皆でミュージカルを楽しむ

上記のように楽しい展開が可能であることがわかる。また、既に数多くの実践が展開されている。新聞紙の大きさに匹敵するようなビッグブックの誕生もそれに拍車をかけている。

③『せかいいち うつくしい ぼくの村』(ポプラ社)の原典絵本と教科書(東京書籍)との相違をとりあげ、作者にその思いを聞き、考察をおこなう。

この絵本の内容は主人公ラモの目を通してアフガンの平和な村が戦争によって破壊されてしまったことが描かれている。作者、小林豊氏は、教科書の挿絵を自らが特別に書き下ろしているという特異性がある。そのため、絵本の読み取りと教科書の読み取りとの比較等について、インタビューを行い、作者としての思いを語ってもらうことができた。それを要約すると次のようなものになる。

- 絵本と教科書教材には見開きの仕方が異なっている。それぞれの特色をいかず事が肝要である。
- 絵本は絵本として既に発表したものであり、独立している。
- 教科書に挿絵を書くときは、自分の絵本の雰囲気をも伝えるために、自分の思いを込めて書くことになる。
- 自身が作家でもあり、画家でもあるので、自分の納得のいくものを教材文でも心がけている。
- 自分の見聞を基にして三部作の絵本を作成した。その一部がこの絵本であり、教科書教材に採用されることになり、より多くの読者を得ることができた。

ここに見るように、小林豊氏は絵本は独立した存在とし、テーマから三部作として捉えておられる。また、教科書教材は自分の作品に触れる読者の拡大という捉え方をしてい

ることがわかる。

小林豊氏が多くの作者と異なっているのは、教科書教材に、絵本の絵図版にはない挿絵を教科書用にオリジナルにかきおろしていることである。

その点に関しては、書下ろしの挿絵を挿入することでより多くの読者に理解をしてもらいやすくするための努力として語っておられた。

先の『スイミー』と比較すると、『スイミー』が途中の絵図版が自己回復というクライマックスに対し、『せかいいち うつくしい ぼくの村』では最後にクライマックスがある。それは戦争の後に村が破壊されてしまったことの悲劇を、最後の行で書いていることでわかる。衝撃的な終結である。

この としのふゆ、
村は せんそうで はかいされ
いまは もう ありません。

しかもこのページは、少しくリーム色がかった土色が一色になっている。つまり、最終ページには主人公も家族も村も何も描かれていないのである。

一方、教科書教材は、この部分が最後の頁になっていることは同じである。しかし、ここには、主人公ヤモとこひつじととうさんの後ろ姿が描かれているのである。

それらのまなざしが、遠く廃墟となった村に注がれているという象徴的な最後の挿絵になっているのである。つまり、教科書の挿絵は挿絵自身が登場人物の心情を理解しやすいような、読解の意味を補いようなものとなっているのである。

小林豊氏はこういった手順を経ても、より多くの読者にこの絵本が原典となった作品を読んで欲しいと願っていたのである。

ともすると、教科書教材は絵は挿絵としてそれほど大きな意味を持たない。しかし、理解を補い挿絵として、この教科書教材で作者がオリジナルな挿絵を書き下ろした意義は大きい。

作者自身が、教科書教材を読み込み、文字中心となった者を補いために、書き下ろしたからである。

自らが著者であり、作家であるからこそ、それぞれの特質をいち早く理解し、それぞれにふさわしい対応が可能であったという事例なのである。

なお、指導書は次のようになっている。平成 25 年度のものによると、大きく二つの方向を示唆している。

第一は読書会、第二は音読会である。それぞれについて説明をすると次のようになる。第一の読書会については「読書発表会で自分と友達の読みの似ているところと違うところを比べることで、児童は自分の感想への認識をふかめていくことができる。作品を紹介するために自らの感想を深めたり、紹介し合った本への質問や感想を交流したりすることで、さらなる読書意欲を喚起し、児童の読

書生活が豊かに広がることを目指して、本教材を設定した」とある。

第二の「音読会」に関しては、「物語のシリーズを通して読み、音読で表現する」というものである。作者の小林豊氏の作成意図にも近い、三部作を視野に入れた読書を含めての音読会となっている、多読の方向でもある。「家族やふるさとを思う心を描いた本を読む」というような含みを持っている。

以上のような指導の方向が記されており、多くの展開が予想できる。

④絵本を用いた教材化の実践事例

-幼稚園・小学校・特別支援・書店・高等学校-

④-1 幼稚園の場合

茨城県石岡市国分寺幼稚園・駒井さゆり氏

幼児教育の保育の現場では日常的に絵本を用いて読み聞かせを行っている。その理由は、視覚的に絵を理解し、聴覚的に日本語を理解し、それらの総合から、絵本で描かれた世界を享受するからである。

幼児の感受性を育み、感受性や表現力を育むことになるのである。勤務先の幼稚園は仏教的保育を行っており、「生命尊重」を一義とするテーマから絵本を選択している。

具体的に次のような絵本を推薦する。

『月にいったうさぎ』(谷伸介・偕成出版)

『おじいちゃんのごくらくごくらく』

(西本鶏介文、長谷川義史絵、鈴木出版)

『おじそうさまとこぶた』

(作絵、長野ひろかず、ひさかたチャイルド)

幼児教育期における絵本は、人格形成にも関与する貴重な教育的な営みである。絵本の持つ意味を指導者は認識しながら、教育場面で用いることが肝要である。

何をいつ、どのようにして読むのかということ念頭におきたい。

④-2 小学校

元群馬県公立小学校・品川孝子氏

小学校では絵本を読書と結びつけることが多い。低学年では絵本がそのまま読書教材である。例えば、民話である。『さんまいのおふだ』や『かさこじぞう』などがそれに該当する。

しかし、物語絵本以外の写真絵本などは説明文の指導後の発展的な読書として中学年以上でも取り扱うことがある。

また、説明文の『ありの行列』等ではほかの科学的な文章を読もうという指導の展開なども可能である。このように物語絵本から、写真絵本、解説をするような絵本なども幅広く読書の対象として小学校では取り扱うことになる。

④-3 特別支援学校

東京都墨東特別支援学校・生井恭子氏

特別支援学校の中でも訪問学級の事を中心にしたい。というのも、個別の指導になるからである。そのため、教材として絵本の価値が大変に高くなるのである。理由は、障害

を持つ子ども達に絵本を読むことにより、その絵本の世界を追体験することができるからである。

私の実践としては『トマトさん』(田中清代作、福音館書店)の事例をあげたい。身体的な理由から絵本の絵を自分でめくることが出来にくい児童に、めくる装置を工夫して作成し、それを用いることで自分で繰り返して読む楽しさを知ることが出来た。もちろん、この絵本のトマトさんの絵の色彩の鮮やかさや、冒険するトマトさんの行動が、児童の心を魅了したことはいうまでもない。

そのように教師が児童に楽しんでもらいたいという願いを基にして、絵本を選択し、その中から、児童自身が好みの絵本を選び、それを味わうことができる。そういった環境作りが訪問学級では必要である。

④-4 書店

岩崎書店・大塚奈緒氏

教科書に原典絵本が採択されることは多くの読者を得ることになるので、そのこと自体を喜ぶ。

絵本というものは色味が命でどれだけ原画に近づけるかということに命をかけてやっている。それが教科書ではどうなのかという点は大変気になる。

また、書店としては絵本が子どもの手に渡るまでは、企画会議では今の保護者に受け入れられるかどうかということが、いつも問われることになっている。あくまで、購買層は保護者としている。

その一方で子どもの貧困格差があるため、購買の差に示される。そこで、重要になるのは学校教育である。学校という公共の場で、ボランティアによる読み聞かせ、学校の中の図書館、そして、教科書というそれぞれの潮流があれば、子どもの平等の機会が保証されていく。

また、絵本に版元が託すことは何かというと、読んでもらった時の喜びや温かみも一緒に人生の困難に遭遇した時に支えになるのではないかということ。また、大人が1冊の絵本に込めた懇切のメッセージを受け止めてもらえるのではないかということ。そうなるように本を作っていきたい。

次に小学校の国語教科書の出てくる本の一部を掲げる。(1、2年)

(光村図書)

『はなのみち』岡信子作、土田義晴絵

『川崎弘詩集 どうぶつぶつぶつ』川崎弘作、編、北川幸比古

(東京書籍)

『武鹿悦子詩集たけのこぐん!』武鹿悦子著、編伊藤英治

『としょかんライオン』ミシェル・ヌードセン作、ケビン・ホークス絵

『やまたのおろち』羽仁進文、赤羽末吉絵
(教育出版)

『どうぶつのあしがたずかん』加藤由子文
ヒサクニヒコ絵

『みえないってどんなこと?』星川ひろ子写
真・文

(学校図書)

『つきよに』安房直子作、南塚直子絵

(三省堂)

『よしおくんがぎゅうにゆうをこぼしてし
まったおはなし』及川賢治・竹内繭子作絵

『どうぶつをあしがたずかん』加藤由子文
ヒサクニヒコ絵

『やまたのおろち』羽仁進文、赤羽末吉絵

『谷川俊太郎詩集いっしょころ』谷川俊太郎作、
編北川幸比古

④-5 高校の場合

東京学芸大学非常勤講師 ・高見京子氏

岡山の高校に勤務していた体験をまとめ
たい。それは地域の方と一緒に年に数回、読
み聞かせ活動を行っていたことである。

一つは子ども読書の日ブックフェステイ
バル、次は夏休みのイベント。これらの活動
に高校生、地域の方、イベントを行う方が一
体となって、読み聞かせを行うことがあった。

男子生徒も意欲的に参加し、自分で読む本
を選択することとしていた。

また、私自身が絵本も含めて日常的に本を
紹介していた。たとえば、クラス総合の余っ
た時間等には絵本が最適であり、クラスで温
かい気持ちになりたいときにはそれに匹敵
するようなものを選択した。(『100 万回生き
たねこ』佐野洋子作・絵)

また、高校生には視点の変容を学ばせるに
は絵本を用いた。例えば、『ますだくんのラ
ンドセル』(武田美穂作・絵)や『おさるは
おさる』(いとうひろし作・絵)などもある。

個人的には、絵本というものをそれで、区
切りたくはない。どういう意味かというと、
ジャンルを問わず、教師は絵本や本を切り口
として様々な生徒に関わって、読む楽しさを
味わっていけるようにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計2件)

①有働玲子 『絵本を出典とした教材の一考
察—『世界一美しいぼくの村』(小林豊)
を通して』「解釈」N060、46-53、2014-05

②有働玲子 『教材『スイミー』の指導の一
考察』「解釈」N058、53-60、2012-05

[図書] (計1件)

①有働玲子 編著『国語・音声・読書の指導』
萌文書林 2015-09 294

[その他]

[公開研究会]

①有働玲子 「絵本と国語教材について」
2016-2-20 プラザエフ (東京都千代田区)
13時-16時

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有働 玲子 (Udou, Reiko)

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号: 50232880